



救急初療における高齢者への看護ケア

著者名	山崎 千草
発行年	2020-03-23
URL	http://doi.org/10.20780/00032634

氏名：山崎 千草
学位の種類：博士（看護学）
学位記番号：甲 第47号
学位授与年月日：令和2年3月23日
学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当
論文題目：救急初療における高齢者への看護ケア

論文審査委員：主査 教授 小川 貴久子
副査 教授 守屋 治代
副査 教授 青木 雅子

論文内容の要旨

I.はじめに

超高齢化に伴い、65歳以上の救急搬送が増加している。ICUなどの救急初療の現場では、高齢者の救命に看護師の戸惑いが生じている。そこで、本研究の目的は、救急初療における高齢者への看護ケアについて明らかにすることである。

II.研究方法

救急初療の実務経験のある急性・重症患者看護専門看護師（以下 CCNS）30名を対象に混合研究法で行った。調査方法は、半構成的面接と Frommelt のターミナルケア尺度日本語版（以下 FATCOD-B-J）、改訂道徳的感受性質問紙日本語版（以下 JMSQ）、改訂出来事インパクト尺度日本語版（以下 IES-R）の質問紙調査を行った。分析は、質的記述的分析および量的データの比較分析を行った。本研究は東京女子医科大学倫理委員会の承認を得て行った（番号：4428-R）。

III.結果

研究参加者は CCNS30名で、看護師経験年数は9～32年、救急初療経験年数は1～25年、CCNS年数は1～10年であった。質的記述的分析の結果、救急初療における高齢者への看護ケアでは、時間の切迫感を感じながら救急初療での高齢者への看護ケアを行っている看護師は【年齢によって治療が縮小されるべきではない】という倫理観を持ちながら、高齢者が救急搬送されてきた時に【患者を表面的にみて判断】し、【患者を救命できるかどうか査定】していた。患者の治療方針に対して【組織的な圧力を感じ】ながらも屈せずに時間の切迫感を超越していく看護師は、【患者の大事にしていることを知るまでは救命を諦めない】という思いで個人を尊重した看護ケアをしていた。一方、病院やICUの組織的な圧力に屈した看護師の場合は、【家族の思いより、医療者の判断の流れに委ね】時間の切迫感を抱えたままの流れ作業の中で看護ケアを行っていた。

次に、時間の切迫を感じながら救急初療での高齢者へ看護ケアを行っている看護師の分析を進めると、質の違いがあり、「時間の切迫感を超越」と命名した。時間の切迫感を超越している看護師には【チームとしての万能感を得る体験】、【自分の死を覚悟する】、【身近な人の死】、【看護師の成長のきっかけとなる患者の死】

など接死体験があった。最後に質的分析と量的データを比較した結果、時間の切迫感を超越している熟達者でデータのばらつきが少ない項目は、FATCOD-B-J 下位尺度の〈死にゆく患者への前向きさ〉と、JMSQ 下位尺度の〈道徳的強さ〉と〈道徳的な気づき〉であった。一方、データのばらつきが大きかった項目は、FATCOD-B-J 下位尺度の〈患者・家族を中心としたケアの認識〉であった。

IV. 考察

救急初療の看護師が時間の切迫感を超越する鍵は、【組織的な圧力を感じる】という障壁であると考えられた。【組織的な圧力を感じ】ても屈せずに、患者を尊重したケアを優先できる時は、これから行おうとする看護ケアに確固たる自信があること、仲間からの協力が得られる時であることが示唆された。さらに、時間の切迫感を超越した熟達者の特徴から、救急初療という場だからこそ高齢者を一人の人として捉え、家族も含めた個人を尊重したケアを行う重要性が示された。

論文審査結果の要旨

65歳以上の救急搬送が増加する中、救急初療における高齢者への看護ケアについて混合研究法による質的分析から量的データの比較まで行い、その特徴を見出した新規性の高い研究である。

高齢者が救急搬送されてから「個人の倫理観」、「時間の切迫」、「情報量」という3つの軸が救急初療を語る上で共通項であることに着目し、質的分析を行った点が独創的である。救急初療の看護師は、「患者を表面的にみて判断し」「患者を救命できるかどうか査定を行って」いる看護ケアを明らかにした。そして、「患者の大事にしていることを知るまでは救命を諦めない」「年齢によって治療が縮小されるべきではない」という高齢者の看護ケアならではの倫理観を持った専門職者としての姿勢を見出した貴重な研究である。

さらに、救急初療におけるチームとしての万能感を得ることや、看護師の成長のきっかけとなる患者の死などの接死体験をすることが、熟達した看護ケアにつながる点を量的データで裏付けた実践への応用が得られる研究である。

今後は、救急初療で高齢者の看護ケアを強化する方向性をICUなどの臨床で共有し、さらに救急初療の看護実践指針として反映させ、看護の発展に寄与すると考える。

以上、本学位申請論文審査の結果、合格とする。